

郷土室だより

第140号

平成23年6月30日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 23-026

「変りゆく都市像」(19)

《風評と市場》

前回まで「記紀」に現れた「市場」の原形を探る作業が続けてきたのだが、予期しなかった大災害が発生し、

まだその復興のメドも十分に付かない現状のもとでは、これまで「いちば」の形を主に追求してきたことを中止して、より「いちば」の本質に迫る作業に切り替えることにした。

◇「風評」と市場

東京では晩春に入ったあの日から早くも初夏を迎えた。アツという間のこの三カ月後である。有史以来の地震と津波で東日本はもとより、列島全体にその影響は深く浸透している。

どのように影響しているかという点を「いちば」に限ってみると、今その最大のものは「風評被害」という形の影響だろう。津波直後からの原子炉の溶融（メルトダウン）という最悪の事態は、二カ月後にやっと公表された。

この事実を正確に知らされなかったということ自体が、国民にとって最大の風評被害なのだが、改めて「いちば機能」に関連させて見ると、未曾有の大災害だからこそ、その被災者と国民は自分の体験と、それを客観的に《観た》結果である「風評」を信頼するほかは無いのだ。

実はこの「変り行く都市像」執筆の目的は、繰り返し述べてきたように、ハコモノとしての「都市」の形状・寸法ではなく、絶えず変化を続ける

「情報を含むヒトとモノの交流の場」の原理的な形の変化の追求を目的にしてきた。

つまり市場こそ「風評被害」ならぬ風評が現実化する場所に他ならないのであり、それゆえに市場⇨都市は変わり続けるのである。以下、そのことを念頭に置きながらこの大災害を機会に、改めて「都市機能」の原点を追い続けることにする。

手じかの国語辞典（『大辞林』）を見ると「風評」とは「よくないうわさ。世の中の取りざた。とかくの風評がある。」とあり、それを補強して「風

評被害とは事故や事件の後、根拠の無い噂や憶測などで発生する経済的被害」だとある。

非常に現代的な状況を前提にしたようなこの国語辞典の解説の仕方は、それなりに適切なものなのだが、現在のようないくつかの状況においては《始めからメルトダウン》という事実を隠蔽したことが、国際的な風評発生最大の原因であり、結果にもなるという好例のようにも読める。

だが日本列島内に限っても《この千二、三百年前からの昔》から、今のようにIT技術による通信手段が普及するまでは、限られた人の歩みの速度で、多くのうわさが広く拡まり流通していた。

《「好くないうわさ」を含めた…むしろその部分の方が多いのが実情だろうが、風評は世間一般の常識⇨世評であり、つまり好・悪取り混ざったうわさそのものともいえるが、同時に「いちば」の情報そのものでもある。

例えば「いちば」内の相場の高下現象そのものが、関係者にとってはただちに「好（善）・悪」の判断についての正確な情報であることはいうま

でもない。

話が飛ぶが「市」という文字は、それが開かれる場所を示す《大きな旗》を意味するものだという『字源』（白川静著）の解釈は、それを読む者に「風」にひるがえる《市の旗》の映像を伴いながらその状況を十分に納得させてくれるものがある。

◇実情報告

てしまうことについては、案外に無関心に見逃していた場合が多い。近代から現代までの経済学がどのように解釈を加えようがその現実はいちばの本質は風評が渦巻く空間なのである。

私は今度の災害被災地に隣接する地域の複数の小企業主たちから、連続的に被災地の種々相の報告を聞く機会に恵まれている。テレビの報道では感じるものの出来ない悪臭・見ることの出来ない遺体・彼らの何回ものボランティア体験・そして眼に見えない放射能への根源的な恐怖などの眼に見えない《空気》をジャーナリストに襲い掛かった……。

都市の情報は「正・邪」、「好・悪」、「高・安」などの対立的条件、つまり風評そのものであり、「いちば」はそうした状況を正確に反映させる役割の場所だった。その意味で「いちば」は《好くないしさ》を含めた風評の発生源であり続ける。そうした意味で「いちば」に飛び交う多様な情報こそ貴重な存在だったのである。

このようなことをこれまでに、手を変え品を変えて述べてきたのだが、例えば歴史的用語としての「近世直前」に発生した、「樂市・樂座」という「いちば」の性格を予断させるような冠称を付けられた「いちば」は、その瞬間から《いちばの神》に見放された存在になっ

れにもかわらず傍若無人に被災地を荒らしまわったグループの存在も風評にのぼった。

第二は「物流」は形ばかりの回復に向かったが、その「物」自体は多くの束縛にがんじがらめにされていて、例えばガソリンはあっても燃料としての用途が定まらな

いまま、保管されてしまい、自動車燃料としては依然として途絶状況を続けるという「物流破壊」。

食糧の場合も同じで、避難所の給食はいわゆる災害定食の形で「与え」られ、極端な例としては一週間おなじ「定食」が供給された

場合も多い。その上に絶対的公平を期することが最優先という原則が、新たな災害の形で被災者の上に襲い掛かった……。

被災地という異常空間の人々の中に、援助側の「善意」と行動が入り込むと、双方に全く予期しない状況が出現させる。

— 原始の昔の「いちば」の原形は、言葉も通じない人々の複数のグループが、偶然に出会って、その場で双方に必要なモノを平和的

に交換することから始まったとすると、この二十一世紀始めの日本社会に発生した二つの異なる社会的ルール《気分》の遭遇は、その昔はどんな形であったかを思わせる。

第三は零細ながら企業活動を維持するために、分に合った求人広告をすると「今どき求人する企業は《忙しいからだろう、そんなところで働きたくはない》という反応が百パーセントだ」という実態がある。それは賃金の高下を問題にする以前の求職者の共通的な言葉だと言う。人々は働くことを拒否し始めたのである。「労働市場」はいま風評被害に翻弄されているのである。

某首長が関東大震災当時に流行った《災害天譴論》を口にして、瞬間的にそれを撤回したことがあるが、「天罰」を怖れずにいえば、

今度の災害は風評を風評のまま定着させた結果としての労働否定社会の幕開けを感じさせるのである。これが零細企業者の実感なのである。

である。

定量を持つ範囲の土地と、そこに住む住民の支配を將軍なり大名から委任されたことを意味した。したがってその範囲が増減することを加封・減封、その場所が変われば移封・転封などと表現された。すべての武家は封の経営の受任者だったのである。

江戸時代には金・銀・銅三種の金属で作られた貨幣が流通していた。この三貨制は江戸の金遣い・大坂の銀遣いで代表される地域別の流通事情があったが、共通的には土地は金遣い、茶葉・薬品などは銀遣いなどと品物によって特徴的な流通をした。

それゆえ「金建て」・「銀建て」、あるいは「米建て」という取引方法がそれぞれ明示されていた。武家の場合の「封建て」を漢字読みにしたのが「封建時代」の「ほうけん」だったのである。

◇都市の誕生

この「封建て」の領域が確定したのは、十六世紀末の徳川政権の

成立以後のことであった。それまでは日本列島自体(北海道を除く)が古代以来の抽象的な範囲での天皇領・公領と見なされ、時代を追って天皇政府(公家)がその支配組織に従事する者に対して土地を「支給」した。

この「支給」の場合の実際も「封建て」と同じくその土地の経営委任だったのだが、現実的には純然とした「私有」と感覚されてしま

い公田・私田の別が発生した(また私田は開発者の土地であり、それに属する私民を含む地域という理解もあつた)。

さらに公田地域に公家や武家が支配を委任された土地や、古代からの神仏に捧げられた地域がやがてそれを祀る寺社に与えられる形となり、寺社領という地目も生れた。

は農・漁・山林・牧畜・石工・金堀・鍛冶・祭祀者・土師などの広範な仕事をする人々がいた。そしてそれらの人々の活躍を結ぶ業態に関わったのが市人だった。また市人は舟・牛馬などの移動と輸送手段を持つ者でもあつた。

無主の《自然状態》にある山地・河川・海岸・平地といった地勢と、それに即した植生などに条件付けられながら、人々は自分達の生活空間を形成していった。それは多くの危険と失敗と災害を記憶し、それを伝承し続けた結果としての分業でもあつた。

農や漁といつても食糧生産専門ではなく、石工もやれば大工もやる、自分が出来ることは何でもやらなければ生活は成り立たなかつた時期である。古代人はエンサイクロペディアでなければ生きては行けなかつたのである。

この分業の中で個々の記憶・伝承を蓄積できた者、とくに天体移動とその周期を知った「日知り」
聖による暦の発見というより知見は、おそらく階級という社会的

分業が発生した最初の姿であつたろう。

前々項の「いちば」概観の項で述べた「公」の支配施設であつた飛鳥・平城・平安と三つの代表的「京」については一二五号で東西の「市」の片鱗を紹介したが、そもそもひとつの都市内に東西二箇所「市」が計画され、それぞれ機能していたということはそれ自体「市」というものの性格を反映させたものであつた。

つまり東西二箇所の市とは単なる上場物資(おそらくまだ商品という感覚は薄かつたであろう)の仕分けや輸送だけの問題で複数が設置されたのではなく、それは東西相互の市の運営状態の比較が出来ることであり、かなり競争的な事柄(都市計画)であつたと考えられる。「複数の市」の論理は「善・悪」の比較をするための手段であり、風評を確認させる方法だったのである。

(この項続く 鈴木理生)